

きっかけは写真

さわ

あらすじ

大野隆志は先輩社員の木村宏と IT 企業で働いている。二人の共通の趣味が旅行。木村の発案で休日にカフェで「写真しりとり」という遊びをすることになる。時代と逆行している遊びだが、お互いの旅行に行った場所を知ることができる。大野は木村と別れた後、自宅で過ごしていたが眠気に襲われる。

特記事項

優しそうな普通の人が実は一番ヤバいのかもしれない。

本編文字数

四九六二文字

自宅近所にあるカフェ「ひるね」に俺と会社の同僚である木村さんは集合した。店の前で待ち合わせ、一緒に入店した。「カラン」とドアベルが鳴った。俺は木を基調とした店内を見回し、窓際の席が空いていた。窓辺に観葉植物が置いてあり、落ち着けそうだ。後ろを振り返り、木村さんに声をかけた。

「木村さん、窓際が空いてますよ。」

「今日の戦いの舞台は、窓際にしましょう。」

木村さんはやる気満々のようだ。ドアベルの音は、戦いのゴングだったのだろうか。俺の横をすり抜け、観葉植物と窓の外を交互に眺めている。動きが小動物のようだ。俺も窓際まで歩き、荷物を降ろして座った。ドリンクを注文する前に、お互いに写真の束を机に置いた。事情を知らない人が見たら、何かよからぬ取引をしているのではないかと勘繰られそうだ。

「手札は十分なようですね。」

木村さんは何かの役になり切っているのだろうか。木村さんの眼鏡が、窓から差し込む光で少し光っている。

「ええ、今日のために準備してきました。」

俺、大野隆志と木村宏はなぜカフェに集まったのか。それは、自分が撮った写真で「しりとり」をするためである。いい大人が何をしているのか…。発端は、俺が木村さんに趣味の話をしたことだった。俺と木村さんが勤める IT 企業、T 社では「お互いのことを知る」という名目で自己紹介資料を作成して共有するという取り組みがある。IT 企業らしくリモートワークする社員が多いため、導入されたようだ。俺は、資料に趣味が旅行である旨を記載していた。木村さんの趣味も旅行だったので、昼休みに話しかけてくれたのだ。俺は体格が良く、強面で近寄りがたい印象を持たれがちだったので、素直に嬉しかった。

木村さんは、俺が配属されたシステム部の一歳年上の先輩だ。新卒で入社した俺の教育担当で、業務内容や社内ルールなどを教えてくれている。仕事を教えてくれたり、上司の田村課長にバレル前に作成した資料のミスを教えてくれたり、とても面倒見の良い先輩で助かっている。木村さんとは同性で歳も近かったこともあり、昼休みは一緒にランチに行くことが多かった。何回かランチに行って、木村さんがどこに住んでいるのか聞いた時、俺と自宅が近いことに驚いた。

旅行の話をしたのも、昼休みに二人で定食屋に行った時だった。木村さんは鮭の塩焼き手定食、俺は唐揚げ定食を注文した。お互いどこに旅行に行ったのか、スマホに保存されている写真を見せ合いながら説明した。俺は、世界遺産に登録されている山や海を見に行くことが多いが、木村さんは地方の観光名所を巡ることが多いようだ。体育会系には見えないので、納得である。会社に戻って午後一の会議の準備をしている時、木村さんが一言「写真でしりとりできそうですね」と言った。

「そうですね、できると思います。」

頼れる先輩の意見には同意しておこう。木村さんは次の会議で司会をやる予定になっていたはずだが、余裕そうだ。この時、俺は写真でしりとりをするイベントが開催されること

など予想していなかった。一時間の会議が終わった後も打ち合わせ資料作成、ベンダーとの打ち合わせ日程調整、勤怠入力、経費精算、社内情報の確認などで定時になった。

業務終了後、俺の隣に座っていた木村さんからイベント開催の告知を受けて驚いた。開催場所は自宅近所のカフェで、しりとりをして負けた方が飲食代を奢るというルールも設定されていた。イベント参加者は、当然木村さんと俺の二人だ。木村さんは、もしや暇だったのだろうか。俺が会議資料作成に苦労している横で、Excel で WBS とシステムの設計書を作成していた気がするのだが…。さすが、企画力と行動力のある先輩である…。

そんなこんなで仕事が休みの土曜日の午前中、カフェに写真を持参したのである。木村さんはオレンジジュース、俺はコーヒーを注文した。二人分のドリンクが手元に届いてからゲームは始まった。先行は、古来より伝わる三すくみの手遊びで決めることにした。カフェにいたので、自然と小声になる。木村さんがパー、俺がグーだった。

「しりとり」の「り」から始めます。僕の一枚目はこれです。旅行に行くときはいつもこのリュックを使っています。」

木村さんが机に置いたのは、荷物が沢山入りそうな黒いリュックの写真だった。リュックの持ち手部分に一匹てんとう虫が留まっているのが可愛い。俺は「く」から始まる物が写っている写真を出さないといけないようだ。写真の束からピッタリの一枚を探した。

「俺は、これを出します。」

机に栗まんじゅうの写真を出した。パッケージに栗まんじゅうと書かれているので分かりやすい。確か家族へのお土産に九州で買ったのだ。木村さんは俺と栗まんじゅうを交互に見て微妙な顔をした。俺が甘いものを食べるように見えないのだろう。その通りである。ほとんど母が食べた。

「大野君は甘い物食べるんですね。知りませんでした。僕の二枚目は海です。沖縄に行った時に撮った写真で、海がとても綺麗でした。」

木村さんの後ろにコバルトブルーの海と、白い砂浜が写っている。確かに綺麗だった。写真に写る木村さんも笑顔である。俺の旅行好きの血が騒ぐ。やはり旅行は楽しい。「み」から始まる写真はあるか手持ちを確認する。早くも手詰まりかと思ったが、一枚出せる写真を見つけた。

「俺は厳島神社の近くにある弥山を出します。」

言ってから気付いたが、俺の負けである。最後に「ん」が付いてしまった。自信満々に海の写真の上に置いただけに恥ずかしい。木村さんがニヤニヤしている。

「大野君、僕の勝ちですね。」

若干芝居がかっている。堂々の勝利宣言である。こころなしか眉毛がいつもより凛々しい気がする。木村さんのオレンジジュース代 600 円を奢ることが決定した。スマホで時間を確認すると、かれこれ 30 分以上お互いに写真を見ながら頭をフル回転させていたようだ。思ったより時間が経っていたようだ。

「思ったより楽しいですね、写真しりとり。でも、スマホで写真を見せたり SNS で送りあ

えたりするのに、わざわざリアルで会ってプリントアウトした写真を見せるのは時代に逆行している気がしますね。」

一戦終わって気が緩んでしまったのか、つい思ったことを口にしてしまった。俺は先輩のメンツを潰したかもしれないと思い、少し申し訳なくなった。

「僕も大野君を誘ってから、すごくアナログだなと思いましたよ。IT 企業に勤めている会社員とは思えない。でも、自分が今まで撮った写真も見直せるし、普段取らない写真も見られて一石二鳥でしたね。フォルダ整理ができました。」

木村さんは特に気にしていないようだ。フォルダ整理が本当の目的だったのでは…。抜け目のない先輩である。確かに俺も過去の写真を漁って、何枚か削除した。自撮りに失敗して手ブレが激しい写真は、肌色の何かが写っているなぐらいの感想しか湧かなかった。そういえば喉が渴いた。視線をコーヒーカップに移すと、コーヒーはすっかり冷めていた。俺は一気にコーヒーを飲みほした。

「そういえば、大野君は東京出身ですよ。東京にいれば遊ぶのに困らなさそうですが、どうして旅行に行くようになったのですか？」

改まって聞かれると答えるのが難しい。

「両親が元々旅行好きで、小さい頃から家族で旅行に行っていたからですかね。」

当たり障りのない回答だが、本当である。家族で旅行するのが当たり前で、大学生になってからは一人で旅行に行くようになった。

「そうなのですね。僕は単純に仕事の息抜きで旅行している感じです。寺社仏閣や温泉に行くと癒されます。」

旅行して癒されるのはとてもわかる。IT 企業に勤めていて、常にパソコンに触っているからか自然が恋しくなる瞬間がある。俺は、木村さんに激しく同意した。

「分かります。俺も都会育ちなのに都会に疲れるというか、自然が恋しい瞬間があります。木村さんと感覚が似ているかもしれないですね。」

木村さんは笑顔になった。笑うと案外子供っぽい顔をするので、普段とギャップがある。

「大野君の体格がいいのは、山に登ったり海に泳ぎに行ったりしているからなのかな。少し羨ましいです。」

木村さんに褒められて悪い気はしない。俺たちは机の上に置かれた写真を片付け、カフェを出ることにした。写真を片付ける時、自分が持っていた写真の束を床に落としてしまい慌てて拾い集めた。机に置いてある写真は、木村さんが集めて渡してくれた。俺は自分の不器用さに苦笑いした。ドリンク一杯で二時間ぐらい居座ったようだ。木村さんが聞き上手なのか、つい話しすぎてしまった。

カフェから出ると、五月の過ごしやすくてちょうどいい風が吹いていた。少し鼻がムズムズする。今日はまだコーヒーしか飲んでいないことを思い出した。木村さんがいるので、どこかでランチを食べるか自宅に帰るか悩む。俺が悩んでいるのを察したのか、木村さんが「僕はこの後用事があるので帰りますね」と言って横断歩道に向かって歩いて行った。残さ

れた俺は、素直に自宅に帰ることにした。

俺の趣味は、学生時代から旅行だが社会人になってから趣味が一つ増えた。それは料理だ。生活費を節約するために自炊するようになった。実家で両親と暮らしている時は、たまにしか料理を作らなかったが、社会人を機に一人暮らしを始めてからはほぼ毎日料理をしている。冷蔵庫を開けて、昨日作った肉野菜炒めと味噌汁を取り出す。炊飯器の蓋を開け茶碗に白米を盛り付ける。電子レンジでもろもろ温め机に並べる。肉野菜炒めと白米を頬張り、味噌汁で流し込む。空の胃袋が満たされるのを感じる。食べ終わった食器を洗った後、どうにも睡魔に勝てなかったので昼寝をすることにした。途中物音がした気がするが、スマホの通知音だろう。

夕方六時ごろ目が覚めた。思ったよりも長く寝ていたらしい。ベッドから起き上がって外を見ると、薄暗くなっていた。眠い目を擦りながら部屋の電気をつけ、カーテンを閉めた。寝る前に部屋の電気を消したのだろうか…。多分無意識に消したのだろう。椅子に無造作にかけていたコートをクローゼットにしまう。

俺はリュックから写真の束を取り出して、改めて全部の写真を見ようと思った。確か二十枚用意したはずだ。平日は仕事に追われ、あまり写真のチョイスが出来なかった。とりあえず最近撮った写真をプリントアウトしただけだった。栗まんじゅうはネタ枠である。仮に写真を今日までに用意できなくても木村さんなら許してくれるだろうと思っていた。

右手で写真の束を持ち左手でめくっていき、机に並べていった。五枚目の写真をめくった時、カフェで木村さんが見せてくれた沖縄の海の自撮り写真が出てきた。

「なんでこの写真があるんだ？」

俺は、先輩の写真が手元にあることに一瞬驚いた。カフェで写真を片付ける時に間違って回収してしまったようだ。月曜日に返そう。俺は忘れないように、仕事用のリュックに先輩の写真を入れた。気を取り直して、残りの写真を見た。巖島神社や瀬戸内海の写真を見て楽しかった思い出に浸った。

枚数を数えたら、先輩の写真を入れて合計二十枚だった。先輩の写真が増えているのなら二十一枚になるはずだが、俺が最初にプリントアウトした写真を数え間違えたのだろうか。確か、俺が写った写真もあった気がするのだが…。多分プリントアウトし忘れたのだろうと思い、俺は夕飯の準備を始めた。

「大野君が僕の写真を持っているだけで嬉しいから全然返してくれなくていいよ。わざわざだからね。僕は先輩の大雑把に見えて気遣いができるところが、本当に好き。でもちょっと警戒心がないよね。僕のことを先輩、先輩って慕ってくれるのは犬みたいで可愛いけど。普通に考えて、偶然会社の先輩が近くに住んでるなんてあるわけないよ。合鍵は教育担当になってすぐに作ったけど、いつ使うか考えてたんだ。ああ、今日は本当にいい日だったよ。大野君のコーヒーに睡眠薬を入れて自宅に返して、寝ている時に部屋に入って監視カメラをセットできたんだから。ついでに大野君の自撮り写真を一枚貰っちゃった。これからもよろしくね、大野君。」